# 万葉集巻十五遣新羅使人歌と万葉歌碑

佐　々　木　　具　　慶

## はじめに

古代史ブームといわれて久しい。それは、古代が我々の住んでいる土地の上に多分に残っているからであろう。古代代表的文献万葉集には、歌4500余首がある。集中に地名2860箇所、同一箇所を整理しても1200箇所が詠みこまれている。一部の地域（北海道、青森、秋田、山形、岩手、沖縄）を除いて、全国各地に及んでいる。大和、飛鳥だけが万葉の地ではない。万葉ゆかりの地は、我々の周りにいくらでも存在している。

万葉歌人として、柿本人麻呂、山部赤人、額田王、山上憶良、大伴旅人、大伴家持等々が知られている。しかし今回ここでは、その存在すら知る人の少ない遣新羅使人の歌と、その歌碑をとりあげて、身近なローカルの万葉の姿をみてみよう。

遣唐使、遣隋使は教科書にも出るが、遣新羅使は教科書にない。しかし、わが国の古代、朝鮮、特に百済、新羅とのかかわりは極めて密接であった。万葉集巻十五には、新羅へ使いした人たちの歌145首がのっている。十数人を除いて、その大部分の歌の作者は不明である。特にすぐれた歌もなく、平凡な歌が多いが、1200年を経た今なお、その心情にじかに触れるものが多い。古代の旅の苦しさを詠う人たちの思いが胸をうつ。

この一群の歌にかかって、24基の歌碑が建てられている。岡山県から、広島、山口、大分、福岡、長崎の各県に及んでいる。この小論では歌碑をたずねて、瀬戸の海を西航し、壱岐、対馬を経て新羅へ渡った往時の人々の心に触れ、万葉集理解の一助とすることができれば幸いと思う。

以下、巻十五の遣新羅使人の歌145首と、関連の万葉歌碑を紹介したい。

## 1．　万葉集巻十五と遣新羅使人歌の構成

万葉集巻十五は、前半は、天平８年（736）の遣新羅使人の歌145首、後半は、天平10年代に越前の国に流罪になった中臣宅守（なかとみのやかもり）と、狭野茅上娘子（さののちがみのおとめ）との贈答歌63首、計208首で成っている。万葉集の部立は、相聞、挽歌、雑歌の三つの分類になっている。その中で、巻十五は変った編集（内容的には単純に２群、部立は混合）になっているのが目につく。巻頭の「目録」に次のようにある。「天平八年丙子夏六月、使を新羅国に遣はしし時に、使人（つかひびと）らの、各〻別を悲しびて贈答し、また海路の上にして旅を慟（いた）み思を陳（の）べて作る歌。所に当りて誦詠する古歌を并せたり。一百四十五首」

このことを公文書によって調べると、『続日本紀』天平８年２月28日の条に「従五位下阿倍

朝臣継麻呂を以て遣新羅大使と為す。」とあり、又4月17日の条に「遣新羅使阿倍朝臣継麻呂等朝を拝す。」とある。更に翌9年春正月27日の条に「遣新羅使大判官従六位上壬生使主宇太麻呂・少判官正七位上大蔵忌寸麻呂等入京す。大使従五位下阿倍朝臣継麻呂津嶋に泊て卒す。副使従六位下大伴宿祢三中病に染て入京することを得ず。」とあり、更に2か月後の3月28日の条に「遣新羅使副使正六位上大伴宿祢三中等四十人拝朝す。」とある。

天平8年（736）は、わが国では聖武天皇の即位13年、奈良時代の最盛期である。一方、当時の朝鮮半島では、新羅が百済・高句麗を亡ぼし、唐軍を半島から追出し、676年に、統一新羅王朝を確立している。新羅律令体制の最も整備された時代である。（当時中国は唐の全盛期玄宗皇帝の時代）従って当時の新羅は、自主独立の気構えを表わし、わが国との国交は友好状態ではなかった。為に、この新羅使の一行は、新羅で何の成果もなく『続日本紀』天平9年2月15日の条に「遣新羅使、新羅国の常礼を失ひて使の旨を受けざることを奏す。」とあるのをみても、はじめから気の重い使であったことがうかがわれる。

遣新羅使人歌145首の内訳は、長歌5首、旋頭歌3首、短歌137首で、作者として名の出ている人名は、秦間満、大判官壬生宇太麻呂、大石蓑麻呂、丹比大夫、田辺秋庭、羽栗、雪宅満、大使阿倍継麻呂、大使の第二男、上師稲足、娘子、葛井連子老、六鯖、副使大伴三中、小判官大蔵忌寸麻呂、玉槻である。なお古歌を除く作者無署名歌は103首ある。

遣新羅使は前後20数回も出かけているが、歌が残っているのはこの天平8年の一行だけである。勅撰集でもない万葉集に、時代の断片をみせる無名歌が、貴重品のように残されたのは、大伴家持の一族の書留めたものが、万葉集に入ったのではないだろうか。

## 2．　万葉集巻十五遣新羅使人の歌

天平8年（736）6月、一行は難波を出航する。当時一行の人数、船の構造等は不明だが、大宝3年(703)遣新羅使のことを記した『三国私記』の中に、「日本国使至。摠二百四人」とある人数くらいだろうか。遣新羅使の身分は、従五位下程度のもので、又その乗組員は『延喜式』「巻三十　大蔵省」に、入新羅使、大使、副使、判官、録事、大通事、史生、知乗船事、船師、医師、少通事、雑使、傭人、鍛工、卜部、梅師、水手長、狭杪、水手などとある。当時の船は底の浅い、手漕ぎの船であった。

巻頭の11首は、妻と夫の贈答歌である。海山遠く、千キロの彼方へ出かける夫、秋になったら又会えるという夫婦の思いが、切々として胸をうつ。新羅までの遙かな旅への不安と焦燥とが感じられる歌がつづいている。この時代の旅は、単なる別居ではない。生死の界に存在することであった。

㊛　武庫の浦の　入江の渚鳥　羽ぐくもる　君を離れて　恋に死ぬべし　(3578)
㊚　大船に　妹乗るものに　あらませば　羽ぐくみ持ちて　行かましものを　(3579)

㊛ 君が行く 海辺の宿に 霧立たば 吾が立ち嘆く 息と知りませ (3580)

㊚ 秋さらば 相見むものを 何しかも 霧に立つべく 嘆きしまさむ (3581)

㊛ 大船を 荒海に出し います君 恙むことなく 早帰りませ (3582)

㊚ 真幸くて 妹が斎はば 沖つ浪 千重に立つとも 障あらめやも (3583)

㊛ 別れなば うら悲しけむ 吾が衣 下にを着ませ 直に逢ふまでに (3584)

㊚ 吾妹子が 下にも着よと 贈りたる 衣の紐を 吾解かめやも (3585)

㊚ わが故に 思ひな痩せそ 秋風の 吹かむその月 逢はむものゆゑ (3586)

㊛ 栲衾 新羅へいます 君が日を 今日か明日かと 斎ひて待たむ (3587)

㊚ はろばろに 思はゆるかも 然れども 異しき心を 吾が思はなくに (3588)

この11首に、遣新羅使人一行のすべての思いが象徴されている。ここにあるのは、つらい別れ、後ろ髪を引かれる思い、秋には逢える望みであり、これから各地で詠まれる歌も、ほとんどこの傾向がつづいている。従って、ここには、遙か新羅まで使いする名誉も、誇りも、使命感もみられない。そして、秋には帰京するということが、執念のように最後までつづいている。

次に、難波での船待ちの間に、大和に帰る歌2首、次いで、愈々船発ちに臨む歌3首がつづく。この後、海路にあって詠んだ歌8首があるが、これは、乗船航海中の作で、難波から広島県鞆の浦まで、武庫の浦、印南都麻、玉の浦、神島の地名がでてくる。更に、そのあと、旅行中の土地土地で誦詠した古歌10首があげられており、これで導入部分が終る構成となっている。以後題詞に寄航した地名が書かれ、それぞれの地で詠まれた歌がのっている。万葉の歌は祈りであり、必死の思いの願望である。旅の歌に地名を詠みこむことは、土地の神々への航路安全祈願である。恋の歌は生への熱烈な願望である。

### 1 備後国水調郡長井の浦

あをによし 奈良の都に 行く人もがも 草枕 旅行く船の 泊告げむに (3612)

大判官

海原を 八十島隠り 来ぬれども 奈良の都は 忘れかねつも (3613)

帰るさに 妹に見せむに わたつみの 沖つ白玉 拾ひて行かな (3614)

難波を出て、長井の浦（広島県三原市糸崎）まで約300キロ、出発後9日目位だろうか。

### 2 風速の浦

わが故に 妹嘆くらし 風早の 浦の沖辺に 霧たなびけり (3615)

沖つ風 いたく吹きせば 吾妹子が 嘆の霧に 飽かましものを (3616)

風速の浦は、現広島県豊田郡安芸津町風早といわれている。瀬戸内海は今でも霧の多いところ。これは巻頭「君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ」(3580) を思い出して詠んだものと思われる。

### 3 安芸国長門の島

石走る　瀧もとどろに　鳴く蟬の　声をし聞けば　都し思ほゆ　(3617)　　大石蓑麿

山川の　清き川瀬に　遊べども　奈良の都は　忘れかねつも　(3618)

磯の間ゆ　激つ山川　絶えずあらば　またもあひ見む　秋かたまけて　(3619)

恋繁み　慰めかねて　ひぐらしの　鳴く島陰に　盧するかも　(3620)

わが命を　長門の島の　小松原　幾代を経てか　神さびわたる　(3621)

長門の島は、呉市南の倉橋島といわれる。長井の浦の西、更に80キロ弱、難波を出て10数日、折から蟬の鳴く夏は来たが、前途は遠く、山川の清き川瀬に遊んでも、奈良の都はまだ忘れられない。

### 4 長門の浦

月よみの　光を清み　夕凪に　水手の声呼び　浦廻漕ぐかも　(3622)

山の端に　月かたぶけば　漁する　海人の燈火　沖になづさふ　(3623)

われのみや　夜船は漕ぐと　思へれば　沖辺の方に　揖の音すなり　(3624)

「長門の浦より船出せし夜、月の光を仰ぎ観て作る歌三首」と題詞にある。長門の浦は長門の島（現倉橋島）の南端本浦あたりをさすといわれる。風光明媚の地である。当時夜は航海しないといわれているが、余りに美しい月の光につられて船出をしたところ、波静かな月明の夜に、他にも同じように船を出して漕ぐ櫂の音がする、という夏の夜の姿が浮かんでくる。このあと「古き挽歌一首短歌を并せたり」があり、その次に「物に属きて思を発す歌一首短歌を并せたり」の長短歌がある。

朝されば　妹が手に纏く　鏡なす　御津の浜びに　大船に　真楫繁貫き　韓国に　渡り行かむと　直向ふ　敏馬をさして　潮待ちて　水脈びき行けば　沖辺には　白波高み　浦廻より　漕ぎて渡れば　吾妹子に　淡路の島は　夕されば　雲居隠りぬ　さ夜ふけて　行方を知らに　吾が心　明石の浦に　船泊めて　浮寝をしつつ　わたつみの　沖辺を見れば　漁する　海人の娘子は　小船乗り　つららに浮けり　暁の　潮満ち来れば　葦辺には　鶴鳴き渡る　朝凪に　船出をせむと　船人も　水手も声よび　鳴鳥の　なづさひ行けば

家島は　雲居に見えぬ　吾が思へる　心和ぐやと　早く来て　見むと思ひて　大船を　漕ぎわが行けば　沖つ波　高く立ち来ぬ　外のみに　見つつ過ぎ行き　多麻の浦に　船を停めて　浜びより　浦磯を見つつ　泣く兒なす　哭のみし泣かゆ　海神の　手纏の玉を家裏に　妹に遣らむと　拾ひ取り　袖には入れて　返し遣る　使無ければ　持てれども　験を無みと　また置きつるかも　(3627)

反歌二首

多麻の浦の　沖つ白珠　拾へれど　またそ置きつる　見る人を無み　(3628)

秋さらば　わが船泊てむ　忘れ貝　寄せ来て置けれ　沖つ白波　(3629)

この歌も、無名歌だが、難波を出発して玉の浦に着くまでの、旅の様子が述べられており、まことに興味深い。なお、この歌は、安芸の長門の浦のあとにでているが、これは玉の浦が安芸にあるのではなく、玉の浦（備前か備中）をすぎて後につくられたので、ここにでているのであろう。

### 5　周防国玖珂郡の麻里布の浦

真梶貫き　船し行かずは　見れど飽かぬ　麻里布の浦に　やどり為ましを　(3630)

いつしかも　見むと思ひし　粟島を　外にや恋ひむ　行くよしを無み　(3631)

大船に　戕柯振り立てて　浜清き　麻里布の浦に　やどりか為まし　(3632)

粟島の　逢はじと思ふ　妹にあれや　安眠も寝ずて　吾が恋ひ渡る　(3633)

筑紫道の　可太の大島　しましくも　見ねば恋しき　妹を置きて来ぬ　(3634)

妹が家道　近くありせば　見れど飽かぬ　麻里布の浦を　見せましものを　(3635)

家人は　帰り早来と　いはひ島　斎ひ待つらむ　旅行くわれを　(3636)

草枕　旅行く人を　いはひ島　幾代経るまで斎ひ来にけむ　(3637)

長門の浦から、麻里布の浦（現在の岩国市の東方室の木あたりか）にむかっていく。潮と波と風にあけくれる毎日の連続であったと思われるが、難波を出て2週間、ここから可太の大島にすすんでいっている。

### 6　大島の鳴門

これやこの　名に負ふ鳴門の　渦潮に　玉藻刈るとふ　海人娘子ども　(3638)　田辺秋庭

波の上に　浮寝せし夜　何ど思へか　心悲しく　夢に見えつる　(3639)

狭い海峡の渦潮に、玉藻刈る海女を眺め、旅の仮寝に夢みるのは、やはり妻のことである。

## 7 熊毛の浦

都辺に　行かむ船もが　刈薦の　乱れて思ふ　言告げやらむ　(3640)　羽栗

暁の　家恋しきに　浦廻より　楫の音するは　海人娘子かも　(3641)

沖辺より　潮満ち来らし　からの浦に　求食する鶴　鳴きて騒きぬ　(3642)

沖辺より　船人のぼる　呼び寄せて　いざ告げ遣らむ　旅の宿を　(3643)

熊毛の浦は山口県熊毛郡上関町室津湾あたりか。今も懐しいような内海の景色の土地だ。

## 8 豊前国下毛郡分間の浦

大君の　命恐み　大船の　行きのまにまに　やどりするかも　(3644)　雪宅麿

吾妹子は　早も来ぬかと　待つらむを　沖にや住まむ　家つかずして　(3645)

浦廻より　漕ぎ来し船を　風早み　沖つ御浦に　やどりするかも　(3646)

吾妹子が　如何に思へか　ぬばたまの　一夜もおちず　夢にし見ゆる　(3647)

海原の　沖辺にともし　漁る火は　明してともせ　大和島見む　(3648)

鴨じもの　浮寝をすれば　蜷の腸　か黒き髪に　露そ置きにける　(3649)

ひさかたの　天照る月は　見つれども　吾が思ふ妹に　逢はぬ頃かも　(3650)

ぬばたまの　夜渡る月は　早も出でぬかも　海原の　八十島の上ゆ　妹が辺見む　(3651)

「佐婆の海中にして、忽に逆風に遭ひ張浪に漂流す。経宿して後に、幸に順風を得て、豊前国の下毛郡の分間の浦に到着す。是に追ひて艱難を悲み、悽惻して作る歌八首」と題詞にある。瀬戸内海では、この佐婆の海（周防灘）が最も広い海だ。ここで逆風ー暴風にあって漂流し、一夜を過した後、分間の浦（現大分県中津市東部）に到着したことが記されている。関門海峡を目指していたのか、最初から分間の浦の方を目指していたのかわからないが、苦しい船旅である。

一行は漸く九州に着いた。もう20日近くたっている。ここではじめて「大君の命恐み大船の行きのまにまに」という、多少使命感のうかがえる言葉が歌にみえてくる。しかし、これを詠んだ雪宅麻呂は、その後間もなく、壱岐で亡くなるのが痛ましい。

## 9 筑紫の館

筑紫の館に至りて遥かに本郷を望みて、悽愴みて作る歌四首

志賀の海人の　一日もおちず　焼く塩の　辛き恋をも　吾はするかも　(3652)

志賀の浦に　漁する海人　家人の　待ち恋ふらむに　明し釣る魚　(3653)

かしふ江に　鶴鳴き渡る　志賀の浦に　沖つ白波　立ちし来らしも　(3654)

今よりは　秋づきぬらし　あしひきの　山松かげに　ひぐらし鳴きぬ　(3655)

七夕に天漢を仰ぎ観て、各々所思を陳べて作る歌三首

秋萩に　にほへるわが袿　濡れぬとも　君が御船の　綱し取りてば　(3656)　大使

年にありて　一夜妹に逢ふ　彦星も　われにまさりて　思ふらめやも　(3657)

夕月夜　影立ち寄り合ひ　天の河　漕ぐ舟人を　見るが羨しさ　(3658)

海辺にして月を望みて作る歌九首

秋風は　日にけに吹きぬ　吾妹子は　何時とかわれを　斎ひ待つらむ　(3659)

大使の第二男

神さぶる　荒津の崎に　寄する波　間無くや妹に　恋ひ渡りなむ　(3660)　土師稲足

風のむた　寄せ来る波に　漁する　海人娘子らが　袿の裾濡れぬ　(3661)

天の原　ふり放け見れば　夜そ更けにける　よしゑやし　独り寝る夜は

明けば明けぬとも　(3662)

わたつみの　沖つ縄海苔　来る時と　妹が待つらむ　月は経につつ　(3663)

志賀の浦に　漁する海人　明け来れば　浦廻漕ぐらし　楫の音聞ゆ　(3664)

妹を思ひ　眠の寝らえぬに　暁の　朝霧隠り　雁かねそ鳴く　(3665)

夕されば　秋風寒し　吾妹子が　解き洗ひ衣　行きて早着む　(3666)

わが旅は　久しくあらし　この吾が着る　妹が衣の　垢づく見れば　(3667)

秋には帰る予定が、筑紫の館に着いたのが、七夕の頃である。難波出発後1か月、漸く筑紫の館（筑紫に設けられた外国使節等の接待用の館舎をいう。後には鴻臚館と呼ばれた。現在の福岡平和台球場のあたりといわれている。）にたどりつき、遙かに大和を偲んで歌を詠んでいる。あるいは七夕に天の川を仰ぎみて思いをのべ、あるいは又、海辺に月を望んで詠んだのが一連の作である。

## 10　筑前国志麻郡の韓亭

筑前国の志麻郡の韓亭に到りて船泊てて三日を経たり。時に夜の月の光皎皎として流照す。奄ちにこの華に対して旅情悽噎し、各々心緒を陳べて聊かに裁る歌六首

大君の　遠の朝廷と　思へれど　日長くしあれば　恋ひにけるかも　(3668)　大使

旅にあれど　夜は火ともし　居るわれを　闇にや妹が　恋ひつつあらむ　(3669)

大判官

韓亭　能許の浦波　立たぬ日は　あれども家に　恋ひぬ日は無し　(3670)

ぬばたまの　夜渡る月に　あらませば　家なる妹に　逢ひて来ましを　(3671)

ひさかたの　月は照りたり　いとまなく　海人の漁火は　ともし合へり見ゆ　(3672)

風吹けば　沖つ白波　恐みと　能許の亭に　数多夜そ寝る　(3673)

韓亭は、今唐泊とかく。福岡市西区宮浦唐泊で、博多湾の西側、糸島半島の先端に近い。亭は舟着き場、またそこの宿舎をさす。筑紫の館を出て、まず船を韓亭まで進め、ここでいよいよ玄界灘に出る風待ちをしたのだろう。ここまでは博多湾内、外海に出るには、潮と風の条件がいったのであろう。それが「船泊てて三日を経たり」になったのか。相変らずの旅愁、妻恋の毎日がつづく。

### 11 引津の亭

草枕　旅を苦しみ　恋ひ居れば　可也の山辺に　さ男鹿鳴くも　(3674)　大判官

沖つ波　高く立つ日に　あへりきと　都の人は　聞きてけむかも　(3675)　大判官

天飛ぶや　雁を使に　得てしかも　奈良の都に　言告げ遣らむ　(3676)

秋の野を　にほはす萩は　咲けれども　見るしるし無し　旅にしあれば　(3677)

妹を思ひ　眠の寝らえぬに　秋の野に　さ男鹿鳴きつ　妻思ひかねて　(3678)

大船に　真楫繁貫き　時待つと　われは思へど　月そ経にける　(3679)

夜を長み　眠の寝らえぬに　あしひきの　山彦響め　さ男鹿鳴くも　(3680)

唐泊から壱岐へむかうのに、糸島半島を廻り、引津の亭で碇泊している。この頃すでに7月も半ばを過ぎ、大陽暦では8月下旬から9月にかけての台風シーズンの最中に入っていった。美しい可也山の麓で、男鹿の鳴く声に、旅の苦しさに思いをいたし、空飛ぶ雁に故郷を思い、萩の花にも妻を思い、苦しい風待の日々を過している。

### 12 肥前国松浦郡の狛島の亭

肥前国の松浦郡の狛島の亭に船泊てし夜、遙かに海の波を望み、各〻旅の心を慟みて作る歌七首

帰り来て　見むと思ひし　わが屋外の　秋萩薄　散りにけむかも　(3681)　秦田麿

天地の　神を祈ひつつ　吾待たむ　早来ませ君　待たば苦しも　(3682)　娘子

君を思ひ　吾が恋ひまくは　あらたまの　立つ月毎に　避くる日もあらじ　(3683)

秋の夜を　長みにかあらむ　何そここば　眠の寝らえぬも　独り寝ればか　(3684)

足姫　御船泊てけむ　松浦の海　妹が待つべき　月は経につつ　(3685)

旅なれば　思ひ絶えても　ありつれど　家にある妹し　思ひがなしも　(3686)

あしひきの　山飛び越ゆる　雁がねは　都に行かば　妹に逢ひて来ね　(3687)

引津の亭を出た一行は、唐津湾を横切って狛島の亭にむかっている。今この狛島という島はなく、柏島の誤写と思われ、現在の神集島と考えられている。難波を発って2か月。愈々九州本土と別れ外海にのり出す。妻を思う心ますますたかまり、哀愁の歌が詠まれている。

### 13 壱岐の島

壱岐の島に到りて、雪連宅満の忽ちに鬼病に遇ひて死去りし時に作る歌一首

天皇の　遠の朝廷と　韓国に　渡るわが背は　家人の　斎ひ待たねか　正身かも　過しけむ　秋さらば　帰りまさむと　たらちねの　母に申して　時も過ぎ　月も経ぬれば　今日か来む　明日かも来むと　家人は　待ち恋ふらむに　遠の国　いまだも着かず　大和をも　遠く離りて　石が根の　荒き島根に　宿りする君　(3688)

反歌二首

石田野に　宿りする君　家人の　いづらとわれを　問はば如何に言はむ　(3689)

世の中は　常かくのみと　別れぬる　君にやもとな　吾が恋ひ行かむ　(3690)

右の三首は挽歌なり

このあと、葛井連子老の長歌一首、反歌二首、六鯖の長歌一首、反歌二首計六首の挽歌がつづいている。

一行は遂に壱岐に着いた。難波を離れて700余キロ。2か月をこえた。秋の帰京も絶望的である。ここで、最初の死者がでた。前途に不安と懐疑を抱いていた一行にとって、それはショッキングな出来事であった。「わたつみの恐き道を安けくもなく悩み来て今だにも喪なく行かむと」漸く壱岐までやって来、外つ国へ渡る荒海の航海の恐れのやさき、彼の死が一行に与えた恐怖が、いかに大きかったか、壱岐で詠まれた一連の挽歌からうかがわれる。

### 14 対馬島の浅茅の浦

対馬島の浅茅の浦に到りて船泊てし時に、順風を得ず、経停まること五箇日なり。ここに物華を瞻望し、各々慟む心を陳べて作る歌三首

百船の　泊つる対馬の　浅茅山　時雨の雨に　もみたひにけり　(3697)

天離る　鄙にも月は　照れれども　妹そ遠くは　別れ来にける　(3698)

秋されば　置く露霜に　堪へずして　都の山は　色づきぬらむ　(3699)

壱岐から対馬へ。対馬海峡は、昔も今も、海の難所だ。今日でも、船にゆられて対馬までくると、これらの歌の心を、素直に理解できる。

やっとついた対馬で、時雨の雨に煙る紅葉の浅茅山を眺め、対馬の晩秋の月に都の妻を偲び、

浅茅の浦の晩秋に都の秋を思い、切々たる旅愁をうたいあげている。

## 15 竹敷の浦

竹敷の浦に船泊てし時に、各ゝ心緒を陳べて作る歌十八首

あしひきの　山した光る　黄葉の　散りの乱ひは　今日にもあるかも　(3700)　大使

竹敷の　黄葉を見れば　吾妹子が　待たむといひし　時そ来にける　(3701)　副使

竹敷の　浦廻の黄葉　われ行きて　帰り来るまで　散りこすなゆめ　(3702)　大判官

竹敷の　うへかた山は　紅の　八入の色に　なりにけるかも　(3703)　小判官

黄葉の　散らふ山辺ゆ　漕ぐ船の　にほひに愛でて　出でて来にけり　(3704)

竹敷の　玉藻靡かし　漕ぎ出なむ　君が御船を　いつとか待たむ　(3705)

右の二首は、対馬の娘子名は玉槻のなり。

玉敷ける　清き渚を　潮満てば　飽かずわれ行く　還るさに見む　(3706)　大使

秋山の　黄葉を挿頭し　わが居れば　浦潮満ち来　いまだ飽かなくに　(3707)　副使

物思ふと　人には見えじ　下紐の　下ゆ恋ふるに　月そ経にける　(3708)　大使

家づとに　貝を拾ふと　沖辺より　寄せ来る波に　衣手濡れぬ　(3709)

潮干なば　またもわれ来む　いざ行かむ　沖つ潮騒　高く立ち来ぬ　(3710)

わが袖は　手本とほりて　濡れぬとも　恋忘れ貝　取らずは行かじ　(3711)

ぬばたまの　妹が乾すべく　あらなくに　わが衣手を　濡れていかにせむ　(3712)

黄葉は　今はうつろふ　吾妹子が　待たむといひし　時の経ゆけば　(3713)

秋されば　恋しみ妹を　夢にだに　久しく見むを　明けにけるかも　(3714)

独りのみ　きぬる衣の　紐解かば　誰かも結はむ　家遠くして　(3715)

天雲の　たゆたひ来れば　九月の　黄葉の山も　うつろひにけり　(3716)

旅にても　喪無く早来と　吾妹子が　結びし紐は　なれにけるかも　(3717)

浅茅の浦の歌の次に、竹敷の浦で詠んだ歌が続いている。この間距離にしてもわずかだ。折角5日間、浅茅の浦に碇泊し、漸く船出したのに、何故すぐ竹敷の歌がでているのだろうか。今、浅茅湾を訪ねても、実におだやかで、すいこまれるような静かな海だ。わずかのこの距離で、事故があったとも思われない。記録には何もないが、一説には、浅茅の浦から船出して、一度外海に出たのだが、海が荒れて進めず、再び浅茅湾にひき返し、竹敷の浦に碇泊したのではないかといわれている。或いは又浅茅の浦碇泊中の一日、大使以下うち揃って竹敷に出かけて宴をひらいたのかもしれない。

愈々旅も終りに近づいている。対馬を出れば次はもう新羅へ渡るだけだ。国交状態もうまくいってなく、疫病への恐れもある。不安と焦燥と、望郷と妻恋と、もろもろの思いがまざりつ

つ、束の間のやすらぎが対馬の数日間であったであろう。

そして一行は、後ろ髪をひかれる思いで、最後の航海へ船出していった。往路はこれで終る。

⑯ 播磨国家島（帰路）

筑紫に廻り来りて海路より京に入らむとし、播磨国の家島に到りし時に作る歌五首

家島は　名にこそありけれ　海原を　吾が恋ひ来つる　妹もあらなくに　(3718)

草枕　旅に久しく　あらめやと　妹に言ひしを　年の経ぬらく　(3719)

吾妹子を　行きて早見む　淡路島　雲居に見えぬ　家つくらしも　(3720)

ぬばたまの　夜明しも船は　漕ぎ行かな　御津の浜松　待ち恋ひぬらむ　(3721)

大伴の　御津の泊に　船泊てて　竜田の山を　何時か越え行かむ　(3722)

遣新羅使人一行の往路の歌は、対馬で終る。新羅での歌は何も残っていない。復路、播磨国家島まで帰りついた時に詠まれたのがこの歌である。そこには、使命を果した気負も、喜びもみられない。ただ妻恋の思いがますますつのっているだけである。

かくして、天平８年の遣新羅使の任務は終った。復路、大使阿倍継麻呂は対馬で死去し、副使大伴三中も、病のため、一行より２か月おくれて帰京している。それは惨澹たる結果であった。帰路は、歌も詠めないショックであったのであろう。或いは又、詠めないのではなく、チリヂリに帰り、集録不能であったかもしれないが。

（万葉集の読み下し文は日本古典文学大系『萬葉集四』（岩波書店刊）によった。）

## 3．　経過地に残る万葉歌碑

現在、全国の万葉歌碑の数は、540基に達している。何故これだけ多数の建立をみたのだろう。文学碑としては、芭蕉の句碑につぐ数である。ここ十数年、万葉歌碑を訪ねて廻っているが、廻るあとからあとから新しくできている。

田村泰秀氏『萬葉の碑』に、詳細な資料が紹介されているが、それによると、今日残る最古の万葉歌碑は、元禄10年（1697）10月建立の、埼玉県行田市前玉神社の石灯籠に、白文で刻まれたものである。今から288年前のことである。以後幕末までに21基、明治時代に15基、大正時代に９基、計45基を数えている。万葉歌碑についてのはじめての本は、本山桂川氏『萬葉百碑』（昭和37年刊）である。同書では、102碑であった。その後10年たった昭和47年には、田村泰秀氏の調査で232基、更に10年たった57年はじめに432基（他に関連碑22）とある。そして、57、58、59年とたった今日（59．8．20現在）540基がわかっている。

何故今万葉の歌碑がこのように次々建てられるのだろうか。万葉歌碑建立の由来は、碑陰に、或いは副碑に記されているものもあるが、何もなく、風雪に耐えて、ひっそりと建っているものも多い。そこで、万葉歌碑建立の意義について考えてみたい。

①郷土史の立場から

万葉歌碑があることによって、自分たちの住む土地の歴史と伝統を自覚し、郷土愛へのきっかけとしようとする。

②観光の目的から

万葉集にあらわれた土地の名前をあきらかにし、歌碑を建て、観光地として役立てようとする。

③開発への砦として

最近の急激な自然破壊の時代に、万葉集の故地の自然が、1200年を経てそのまま残ることは極めて難しい。万葉故地の認識を深め、歌碑があることによって、開発への砦とする。

④教育上の立場から

卒業記念等として、学校に歌碑を建て、郷土への関心をもたせようとする。

⑤個人の顕彰として

特定の個人の顕彰の一方法として、万葉歌碑が建立されることがある。

⑥揮毫者選定の意義

色々な意味で、歌碑の揮毫者が決められている。そのことが碑の一つの特色となっていることがある。

次に、万葉歌碑の分布を府県別に眺めると、(田村氏『萬葉の碑』による) ①奈良107 ②富山42 ③福岡38 ④群馬31 ⑤和歌山29 ⑥愛知24 ⑦静岡14 ⑧兵庫・長野10であり、以下は1桁であるが、全国47都道府県のうち0は、北海道、青森、秋田、山形、沖縄だけである。このことから、万葉歌碑は、地名をよみいれた万葉歌の数と、多分に比例していることがわかる。

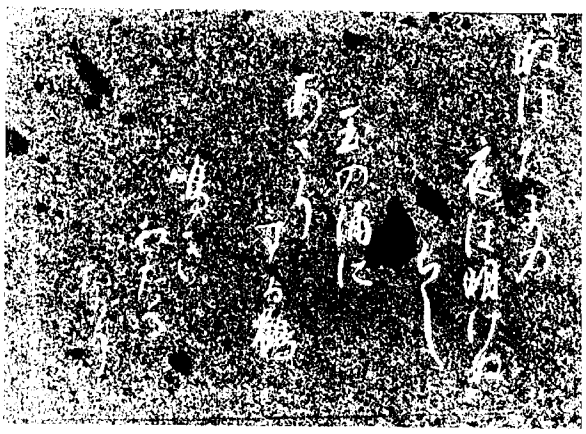
奈良・飛鳥の大和及びその周辺諸国を除けば、歌が集中的にあるのは、大伴家持を中心とする、能登・越中関係、太宰府を中心とした筑紫関係、人麻呂を中心とした石見国、それに東歌・防人歌の東国関係にわけることができる。そして、これらと別枠で、巻十五の遣新羅使人歌群と、中臣宅守・狭野茅上娘子の贈答歌が特異な存在として考えられる。

今、それぞれの歌群と、万葉歌碑をみるとき、遣新羅使人歌関係の万葉歌碑は、岡山県から西へ、広島、山口、大分、福岡、長崎の6県にわたって計24基建てられており、それらが一つのまとまりとしての意味を持つ万葉歌碑の一群となっている。

## 4．　遣新羅使人歌の万葉歌碑

### ①　玉島万葉歌碑（岡山県倉敷市玉島阿賀崎１丁目10－5　玉島公民館前）

ぬばたまの　夜は明けぬらし　玉の浦に　あさりする鶴　鳴き渡るなり　(15-3598)



新倉敷駅南口より玉島バスセンター行で七島下車、東に入った所に玉島公民館（玉島文化センター）がある。その玄関正面にこの碑が建っている。

「玉の浦」の所在については、古来諸説あってあきらかでないが、この歌は、印南都麻（3596）と神島（3599）の間にあるので、もとの浅口郡（現倉敷市玉島）の海岸であろうといわれている。一説には、玉野市玉、西大寺市東方片岡とする説もある。

現在の新倉敷駅から南の方一帯は、古代から中世にかけては海で、海岸は浅瀬、干潟のある地形だったようだ。遣新羅使一行が、玉の浦に立ち寄った時、このあたり鶴の飛ぶ淋しい海岸だったろうか。

なお、この歌碑建設についての詳細な経緯が『倉敷春秋』（第14号75年春季号）にのっている。

昭和49年11月22日建立。書は谷口樵雲氏　自然石（129×230）の枠取凹磨面（76×117）に刻まれている。

### ②　神島万葉歌碑（岡山県笠岡市神島内浦　島の天神社（自在天神宮）境内）

月よみの　光を清み　神島の　磯廻の浦ゆ　船出すわれは　(15-3599)

笠岡駅の西50メートル、井笠バスセンターより外浦行バスにのる。途中神島大橋を渡り25分、島の天神前下車。東へ50メートル。海際の静かな境内にある。

「神島」については、万葉集巻十三（3339）の題詞に、備後国（広島県）神島とあるので、今の福山市神島町とする説と、延喜式神名帳に備中国小田郡神島神社とあるので、備中（岡山県）であるという説がある。又、笠岡市神島に神島神社があるので、ここともいわれるが、神島神社は、南の高島から移されたといわれ、古い神島は或いは高島かもしれない。これらの説に対して、笠岡市で万葉の神島は笠岡市神島であると、この碑を建てて、一歩リードした形となった。神島は周囲20キロ、かつて200メートルの狭い瀬戸によってへだてられていたが、昭

和45年３月神島大橋が開通、陸続きとなった。その後島の北側の干拓が進み、かつての笠岡湾は埋めたてられ、広大な陸地がつくられている。

又、神島は古くから文化の開けた島といわれ、鎌倉末期、中国明代初期の美術品などを所蔵している古寺も多いという。この島天神も、社伝によれば、六百数十年前、貞和年間（南北朝時代）に菅原道真を祭神として創建されたといわれている。

なお、碑陰には、次のような撰文がある。

「われらこよなくふるさとを愛す　すなはち古き代をしのぶよすがとして　ここ神島の神の社の大前に万葉短歌の一碑を建つ

恩師大分大学松本義一名誉教授古典文学の高齢を寿ぎつつ

昭和五十年元旦

笠岡市　中山隆夫　高橋伊三郎　建

笠岡市長　小野博書　笠岡市河相秀信刻」

この歌碑のすぐ横に、かつてこの島に遊んだ頼山陽の詩碑が建ち、歴史を感じさせている。

碑は昭和51年８月29日建立。書は鹿児島寿蔵氏（工芸家 歌人）。自然石（170×145）の枠取凹磨面（114×89）に刻まれている。

**③　長井の浦万葉歌碑**（広島県三原市糸崎町　糸崎神社前の社地）

帰るさに　妹に見せむに　わたつみの　沖つ白玉　拾（ひろ）ひて行かな　(15-3614)　　白文

糸崎駅より糸崎神社行バス、国道２号線を東へ行く。糸崎神社鳥居の右側、道路に面した一角にある。前は２号線、そのむこうはすぐ海。

遣新羅使人の一連の歌に「備後国の水調郡（みつきのこおり）の長井の浦に船泊（ふなは）てし夜作る歌三首」とある。題詞に地名がでてくるのはこれが最初である。水調郡は今も御調郡（みつき）という。備後国西部、三原市、尾道市の南北にわたる地である。又、長井の浦は今の三原市糸崎港あたりといわれる。

土地の伝承によれば、神功皇后が征西の帰途、船を糸崎に寄せて碇泊した際、水を献じた故に水の貢（みつぎ）が郡名の水調（みつぎ）となったという。又、ここの水を長井の水といい、この土地を長井の浦、又は井戸崎（後に糸崎）というようになったといわれている。今糸崎神社境内に「神功皇后御泊旧蹟　御調井」の碑がある。

碑陰に「天平八年丙子夏六月遣新羅使人等備後国水調郡長井浦船泊之夜作歌

昭和四十八年三月　文学博士森脇一夫書

昭和四十八年七月吉日

三原郷土史研究会、旭町青年団旭栄会　三原市郷土を愛する会

撰歌　日本大学教授森脇一夫

助言者　大阪大学名誉教授 犬養孝　日本大学教授 竹内金治郎　三原市文化財委員 白松克太

石材寄附　犬上勲　石工　大田寛

協賛　日本大学万葉講座　糸崎神社　糸崎町内会」とある。

以下世話人の名前が20人ならんで記されている。美しい糸崎の海にむかって建つ碑が、如何に多くの人々の思いを込めて建てられているかがうかがわれる。

台石上の細長い自然石（275×70）に刻まれている。

④　**因島万葉歌碑**（広島県因島市土生町　因島公園）

海原を　八十島がくり　来ぬれども　奈良の都は　忘れかねつも　(15-3613)

三原より高速船27分、尾道より快速船43分で因島土生港につく。港よりタクシー５分、徒歩なら20分。山頂因島公園内「国民宿舎いんのしまロッジ」前。

糸崎長井の浦歌碑と同じく「備後国の水調郡の長井浦に船泊てし夜作る歌三首」の中の１首である。

因島は、中世ここを本拠として活躍した村上水軍の基地であった。周囲20キロ、芸予諸島の一島である。万葉集には、直接因島を詠んだ歌はないが、遣新羅使一行の航路が、すぐ近くを通っているのでこの歌を歌碑に刻んだと思われる。山頂からみおろす瀬戸内の島は大小さまざまの姿をみせている。有人の島、無人の島と目につくが、1200年の昔、あの島の彼方を遣新羅使一行の船が通っていったのが白日夢のように浮んでくる。その船の上で、来し方を振り返り、奈良の都への思いをはせた人の姿が偲ばれる。

歌碑は昭和56年４月建立。書は白川硯舟氏（書家）　自然石（185×110）の凹磨面（154×67）に刻まれている。

⑤　**風早の浦万葉歌碑**（広島県豊田郡安芸津町風早　祝詞山八幡神社境内）

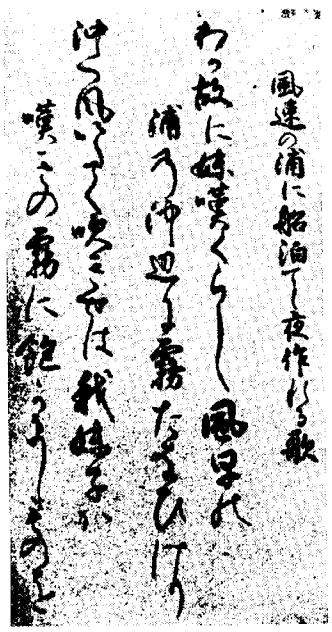
わ可故に　妹嘆くらし　風早能　浦乃沖辺尓　霧たなびけり　(15-3615)

沖つ風　い多く吹きせは　我妹子か　嘆きの霧に　飽可まし毛のを　(15-3616)

呉線風早駅より徒歩２キロ

長井の浦を出た遣新羅使の一行は、安芸の海岸を西航、三津湾西北の風早の浦についている。この間30数キロ。ゆっくり一日の航程である。今、風早は瀬戸内の静かな町にある。海岸一帯には、うちすてられたカキの貝がらが目につき、後背地の丘陵には果物の栽培が盛んである。湾内には、大芝島、藍之島、竜王島などがあり、昔も今も、まことに船泊まりに適した所であ

る。一行がここに泊った夜、静かな海上に一面に霧が出たのを見た一行の一人がよんだのがこの歌である。古代には、霧は人間の心の思いによって生ずると、考えられていた。



歌碑は、祝詞山八幡神社境内の、遙かに風早の海を望む景勝の地にたっている。碑陰によると、当地出身の12名の有志の還暦記念に昭和47年6月11日に建てられたことがわかる。

書は松田弘江氏（書家・歌人）　自然石（210×130）の枠取凹磨面（102×50）に刻まれている。

⑥　**長門島万葉歌碑**（広島県安芸郡倉橋町本浦　桂浜神社前海岸の松林中）

万葉集史蹟長門島之碑

万葉集巻第十五

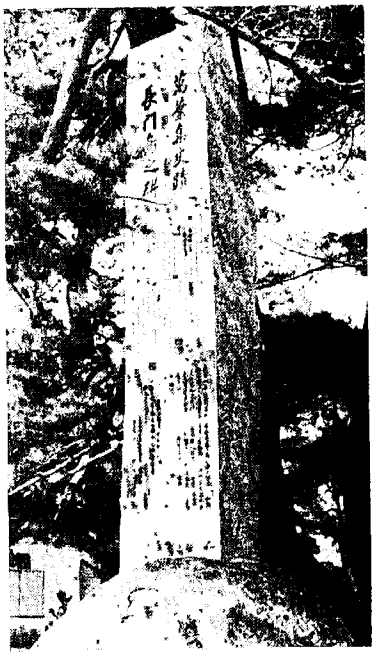
天平八年丙子夏六月遣使新羅国之時使人等各悲別贈答及海路之上慟旅陳思作歌并当所誦詠古歌

安芸国長門島舶泊磯辺作歌五首

32頁③にある3617～3621の歌が書かれている。

従長門浦舶出之夜仰観月光作歌三首

32頁④にある（3622～3624）の歌が書かれている。



呉線呉駅から倉橋島本浦行バス1時間40分、終点下車東へ500メートルにある。

途中、昔から海の難所といわれ、船人たちから恐れられていた音戸の瀬戸をひとまたぎする音戸大橋を渡り、倉橋島に入る。この島が、万葉の時代長門島といわれた所である。今、島は北半分を音戸町、南半分を倉橋町といい、岩石の多い山と、山頂にいたる段々畠の、半農半漁の島である。島民の多くは島外か、呉方面で働く静かな島で、老人と子供の姿が目につく。

この島の南側の海岸に桂浜があり、夏は海水浴場として随分賑わうようだが、それ以外は静かな、文字どおり白砂青松の美しい砂浜である。その海岸の一角に「万葉集史蹟長門島之碑」という堂々たる万葉歌碑がたっている。高さ6メートル余、全国万葉歌碑の中、トップクラスの碑である。上段に万葉歌8首、下段に建立の由来をかいた撰文がある。

遣新羅使一行が、長門島のどこに碇泊したかはさだかでないが、音戸の瀬戸を通らず、この倉橋島を廻っていたと思われるので、恐らく、その碇泊地はこの桂浜あたりではなかったろうか。東の長串の鼻と、西の水長の鼻に抱かれ、沖には島々が浮かぶ絶好の泊地となっている。

一行がここに着いたのは、出発後10日をすぎた頃だった。

碑の建立は昭和19年9月の戦前派、撰文栗田元次氏（広島文理大教授）書は井上民雄氏（広島高師講師）花崗岩磨切石（約600×140）の巨碑である。

⑦　**大島万葉歌碑**（山口県大島郡大島町小松瀬戸　大多満根神社境内瀬戸公園内）

これやこの　名におふなるとの　うづしほに　玉藻かるとふ　あまをとめども　（15-3638）

山陽本線大畠駅下車、駅前より大島本線バス6分。東瀬戸（大島バスセンター）下車東側すぐ。

長門の浦を船出した遣新羅使一行は、能美島、大黒神島、阿多田島とたどって、麻里布（現岩国市の東部）の海に着いたことであろう。ここで詠んだ「周防国の玖珂郡の麻里布の浦を行きし時に作る歌八首」が残されている。ここから、更に陸地づたいに南にさがり、大島を眺めながらよんだ「大島の鳴門を過ぎて可宿（あがま）を経て後に、追ひて作る歌二首」の中にこの歌がある。作者は田辺秋庭とあるが、遣新羅使一行の一人であるとしかわからない。

今も急流のこの大島の瀬戸に、島民3万5千人の永年の夢のかけ橋として、大島大橋がかけられたのが昭和51年7月4日である。5年の歳月と、99億円の巨費が投ぜられ、全長1020メートルの架橋が完成した。大島を渡るとすぐ正面に、端正な形をした飯の山（標高263メートル）があるが、大橋開通記念にその麓一帯が整備され、瀬戸公園と名付けられている。この歌碑は、公園の一角、国道437号線沿いの大島一宮大多満根神社の鳥居のすぐ上に、海にむかってたっている。眼下に渦潮のまく海峡と、それをまたぐ橋を眺める景

勝の地である。少し上には、島で最も古く、島の明神ともいわれる由緒のある神社、大多満根神社がある。更に自動車道もできている飯の山山頂まであがると、展望所からみる360度の景観はすばらしい。東方瀬戸の島々の中に、倉橋島、能美島、宮島も指呼の間だ。遣新羅使一行が通ったと思われる倉橋島から、麻里布の浦、大島の鳴門を経て、熊毛の浦にいたるコースをはっきりよみとることができる。

昭和51年7月4日建立。書は武田祐吉氏（国文学者）　扁平石（210×73）の枠取凹磨面（181×47）に刻まれている。

⑧　**大島開作万葉歌碑**（山口県大島郡大島町小松開作　塩釜神社境内）

わが命を　長門の島の　小松原　幾代を経てか　神(かむ)さびわたる　（15-3621）　白文

山陽本線大畠駅下車、駅前より安下庄線バス16分、開作港下車、徒歩200メートル

この歌は「安芸国の長門の島にして船を磯辺に泊てて作る歌五首」の1首である。塩釜神社は、かつてこの地に塩田が盛んにつくられていた当時の塩の神様である。鳥居をくぐって境内に入ったすぐ左の隅、石垣で囲まれた一角に、この碑がたっている。一目でかなりの年数がたっていることがわかる。変質花崗岩が前のめりにわん曲している。彫ってある字もすでに読み難いが、かろうじて読みとると「天平八年丙子六月遣使新羅国之時使人等云云当所誦詠歌」と題詞があり、次に上記の歌が白文で刻まれている。その左側に短歌らしいものがあるようだが、磨滅してもう読みとれない。碑陰にも漢文が刻んであるが肉眼では判読できない。西村勇氏（山口県小郡町在住拓本研究家）によれば「碑陰の漢文を判読すると、江都で香具を商っている小松平左衛門が萩城へ向う途中此の地で詠んだ歌で、矢田部官兵衛、秋本茂次右衛門、白松弥三右衛門らが、天保九年に建造したものであることが分かる。」とのことである。

従って、これらから判断すると、この碑は、純粋な万葉歌碑ではなく、開連して詠まれた歌の碑を兼ねたもののようである。天保9年（1838）からすでに150年近くの歳月がたっており、今や歌もよめなく、由来もほとんどわからなくなってしまっている。原文に「長門の島」「小松原」の文字があるので、この地小松にちなんでこの歌が選ばれ、建てられたのではないであろうか。

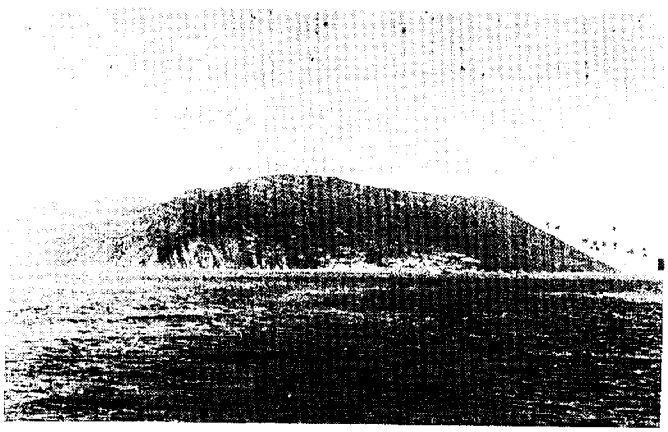
⑨　**祝島万葉歌碑**（山口県熊毛郡上関町祝島　祝島港東端忠魂碑広場）

家人は　帰りはや来と　祝島　斎(いは)ひ待つらむ　旅行くわれを　（15-3636）

草枕　旅行く人を　祝島　幾代経(へ)るまで　斎(いは)ひ来(き)にけむ　（15-3637）

山陽本線柳井駅よりバス、上関町室津港より定期船（1日2往復）

上関は古くから瀬戸内海の要地として栄えた所だが、近くはＮＨＫ連続テレビ小説「鳩子の海」で広く全国に知られた。海峡をまたぐ上関大橋、内海に浮ぶ白帆の漁船と、まことに詩情豊かな港町の風景である。祝島へむかうには、室津港より出発、対岸上関港に寄ったのち、長島の東岸を南下、蒲井、四代に寄港して行く。長年あこがれていた祝島を、はじめて海上遙かに眺めた目の異様な感動を今でもはっきり覚えている。かつて万葉人が内海を往き来する時、この島の姿に神秘的な何かを感じ、思わず祈らざるを得なかったのではなかろうか。



祝島の「祝ひ」は、いつきまつる「斎(いは)ひ」に通じる。「家の者が早く帰ってこいよと、祝島の名のように、斎ひ待っていることであろう。旅を行く私のことを」と、眼前の祝島に懸けて旅行く不安と望郷の思いを込めてうたっている。もう１首も「旅行く人を祝島は、幾世の間もいはひ――無事を祈って忌み慎んできたことであろう。」と敬虔な思いをのべている。

この２首は、「周防国の玖珂郡の麻里布の浦を行きし時に作る歌八首」の中にある。

碑は祝島の船着場に上陸し、左側に少し歩いた所の海岸の広場に、海にむかって建てられている。左側に忠魂碑、慰霊碑（今次大戦中、光海軍工廠で殉職した祝島出身の学徒18名、工員２名のもの）崇祖碑が建っており、これらと共に永く祝島の歴史を物語る記念の碑として親しまれていくことだろう。

なお、この碑は、祝島出身の万葉研究家の石丸寿子女史が、全国の万葉歌碑をみてまわるうちに、郷土の祝島を詠んだ万葉歌を後世に残したい願いから、母石丸アヤ子、妹仲谷富美子と連名で建てたものである。

昭和54年５月25日建立。書は石丸寿子氏　閃緑岩の自然石(150×300)　に刻まれている。

⑩ **分間の浦万葉歌碑**（大分県中津市田尻　加茂神社参道脇）

海原の　沖辺にともし　漁る火は　明してともせ　大和島見む（15-3648）

日豊本線東中津駅より北へ県道に出て西へ進み、川を渡って北へ。海岸に出る少し手前。

大島の鳴門をすぎ、熊毛の浦（①室津、上関か ②平生町小郡か ③光市の室積港かいずれにしても、上関海峡から室積までのどこかの入江の港）に船泊てし、更に佐婆の海（現在の周防灘）に進んだ一行は、ここで大変なことに出会っている。すなわち「佐婆の海中で逆風に遭い、漂流して分間の浦に到着」している。分間の浦は、目的地か漂流地かわからないが、生死の境をさまよう大時化の後、漸くたどりついた分間の浦でよんだ8首の中の1首が歌碑に刻まれている。

ところで、この分間の浦は、現在はつきりしないが、大分県中津市の東部、田尻の東北の和間鼻のあたりといわれている。この付近は近世以降の干拓で大きく変化し、古代の地形と全く変っている。中世以前は、田尻と山国川河口の三角州小祝との間は弧状に湾入し、和間鼻は、その曲浦の東端にあたり、その周辺が風待ちに利用されていたという。遣新羅使の一行は、その西側に碇泊したのであろうか。

歌碑は、海岸近くの人気のない加茂神社の境内に、松林の中にひっそりと建っていた。碑陰に「大分大学名誉教授松本義一先生の古稀を寿ほぎ、ここ加茂神社の神城に万葉集の一碑をたつ」とある。

昭和48年2月15日建立。書は佐藤佐太郎氏（歌人）　台石上の自然石(120×100)に刻まれている。

⑪ **志賀小学校万葉歌碑**（福岡市東区志賀町　志賀小学校校庭）

志賀の浦に　いざりする海人　家人の　待ちこふらむに　明しつる魚　(15-3653)

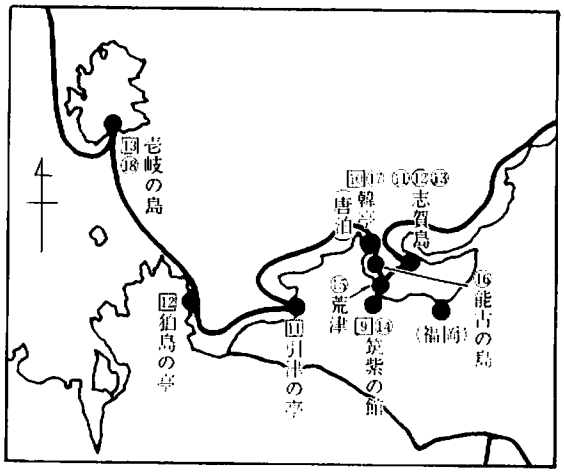
市営志賀島渡船、博多港から45分、志賀島下船徒歩10分。又はバス国民宿舎前下車徒歩3分。

周防灘で暴風に遭い、分間の浦に漂着した後、一行は漸く筑紫の館に着いた。眼前に見る博多湾を眺めながら、難波を出てから1月余、苦難の長旅を思い出し、故郷の家族に思いをはせて詠んだ歌が「筑紫の館に至りて遥かに本郷を望みて、悽愴みて作る歌四首」として万葉集に残されている。碑の歌はその中の1首である。

この碑は「国民宿舎しかのしま苑」の近く、志賀小学校の校庭にたてられ、碑陰には白文も刻まれている。横に解説板もあり、日夜小学生たちに無言のうちに故郷の歴史を語りかけている。

昭和50年3月、福岡市によってたてられる。書は平潟龍祥氏（九州大学名誉教授）　自然石(110×310)　に刻まれている。

ところで、万葉集には、志賀の海人(あま)(白水郎)、志賀の浦、志賀の山等々と、志賀島に関する歌が23首ある。これは万葉びとが、いかに志賀島に関心を寄せていたかが、強く感じられる。そこで、この志賀島を万葉の島として永く後世に伝え、郷土の人々の認識を得るために、志賀島万葉歌碑の建設が計画され、10基の歌碑が建てられた。志賀町時代にはじめられ、合併後は福岡市の事業となった。




⑫　**志賀中学校万葉歌碑**（福岡市東区志賀町大岳　志賀中学校校庭）

かしふ江に　たづ鳴き渡る　志賀の浦に　沖つ白波　立ちしくらしも　(15-3654)

福岡より志賀島行バス大岳下車すぐ。

「かしふ江」は橿生江(かしふえ)（元来は橿の生い茂る土地の意か）であって、香椎潟のことであろうといわれている。志賀小学校の碑の歌と同じ時に詠まれたものである。

志賀中学校の裏から海岸にでると、丁度このあたり「かしふ江」の真只中である。鶴に望郷の思いを寄せ、前途の苦難に思いをいたした一行の心情にふれる思いの歌である。志賀万葉歌碑10基のうち、この碑だけが志賀島々内になく、海の中道側にある。

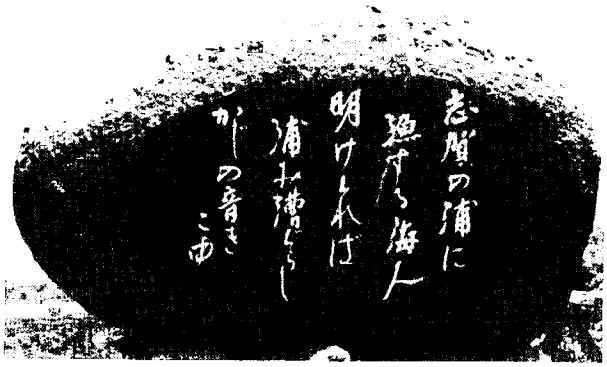
昭和49年3月建立。書は春日春男氏（九州大学教授）　自然石(205×160)裏面に白文

⑬　**志賀島潮見台万葉歌碑**（福岡市東区志賀町　潮見台展望園地内）

志賀の浦に　漁(いざり)する海人(あま)　明けくれば　浦み漕ぐらし　かじの音きこゆ　(15-3664)

志賀海神社より裏山を北へ1.5キロ。車可能。

志賀海神社の左側から山道を歩くこと30分で潮見台公園へ着く。海抜176メートル、島内最高の所だ。島の全体はもとより、九州の山々、玄界灘の島々を眺める島内随一の展望所である。



眼下に志賀の浦をみおろすこの場所は、いかにもこの歌にふさわしい。遣新羅使の一行が筑紫館に着いた後「海辺にして月を望みて作る歌九首」の中の１首である。

昭和46年３月建立。書は古賀井卿氏（書家）　楕円形の自然石（140×225）の凹磨面（90×147）に刻まれている。

**⑭　筑紫の館万葉歌碑**（福岡市中央区城内１区３号福岡城内、平和台球場と陸上競技場の間、土堤の上）

今よりは　秋づきぬらし　あしひきの　山松かげに　ひぐらし鳴きぬ　(15-3655)

地下鉄１号線（姪浜行）赤坂下車徒歩８分。又は姪浜方面行バスで平和台下車徒歩5分。

６月、難波を出発した一行は、ひぐらしの鳴く秋になって、まだ筑紫に滞在している。多くの人たちが、秋になったら大和へ帰るとしてきた約束など、とてもかなうようなあてもない。まだ新羅へも渡っていなく、いつ帰れるともしれない旅の空で、思い出すのはやはり故郷である。「筑紫の館に至りて遙かに本郷（もとつくに）を望みて、悽愴（せいそう）みて作る歌四首」の中の１首、まことに悲愴な思いの歌である。

筑紫の館は、外客や官人の接待や、宿泊にあてた公館（後の鴻臚館）で、現在の福岡城内にあったといわれている。昔の筑紫の館跡の一角にたてられたこの歌碑は、隣の説明板とともに、そういった意味で大変意義のある歌碑だといえる。

昭和43年３月建立。書は倉野憲司氏（国文学者）　自然石の堂々とした巨碑（198×550）である。

**⑮　荒津の崎万葉歌碑**（福岡市中央区西公園81番　西公園鵜来見（うくみ）台展望台）

神さぶる　荒津の崎に　寄する波　間無久や妹に　恋ひ渡りなむ　(15-3660)　土師稲足（はにしのいなたり）

福岡城の西北、博多湾に突き出た丘陵が西公園である。西公園は明治14年荒津公園として開園、明治33年には県の直轄となった福岡市内の古い公園である。この丘は古くは荒津山とよばれており、万葉の荒津の崎、荒津の浜はこの丘の麓にあったと思われる。近世以降埋立てが進み、当時の海岸線はわからなくなってしまった。今このあたり一帯を荒戸町とよんでいるが、これは「アラツ」を万葉仮名で「安良都」と書いたのを、後に「都」を「ト」と音よみし、「アラト―荒戸」となったのではないだろうか。

この山の下、荒津の浜は、かつて日本の西の玄関であり、中国・朝鮮からの使者、中国・朝鮮への使者が皆出入りしたところである。筑紫館（鴻臚館）に結びついた太宰府の門戸となり、後、藩政時代には福岡港として黒田藩52万石の要港となった。

かつての荒津の浜は、今日すっかり変り、石油基地、汚水処理場、漁港施設、アパート群がならび、近代都市福岡の重要な役割を果たしている。丘上には、黒田孝高（如水）長政父子を祀る光雲神社があり、桜・つつじの名所として多くの人出をよんでいる。その西側鵜来見台展望台の一角にこの歌碑がある。碑の前から博多湾が一望され、能古島、志賀島、海の中道が眼前に見える博多大津の絶好の展望台となっている。「海辺にして月を望みて作る歌九首」の中の１首で、作者土師稲足は遣新羅使人の１人としかわからない。

昭和44年３月建立。書は長沼賢海氏（国史学者）　扁平な自然石（287×120）の枠取凹磨面（225×66）に刻まれている。

⑯　**能古島万葉歌碑**（福岡市中央区能古東脇506　永福寺裏山）

風吹けば　沖つ白波　恐みと　能許の亭に　数多夜そ寝る　（15-3673）　　白文

地下鉄１号線姪浜駅、又は姪浜バス停より北へ、海岸に出て渡船15分で能古船着場につく。海岸には10軒以上の旅館、料理屋がならび、博多の離れ座敷となっている感じだ。永福寺は海岸から西へ少しのぼった所にあり、その裏山にこの歌碑がある。

島の北端を也良の崎といい、万葉集巻十六の「沖つ鳥鴨とふ舟の還り来ば也良の崎守早く告げこそ」とあるのがここであるといわれている。古代九州辺境の地に防人が置かれたのだが、その一隊がここに置かれていたことがわかる貴重な歌である。又、也良の崎にも万葉歌碑が建てられている。島は周囲12キロの小さな島だが南北に細長く、志賀島とならんで博多湾の入口を抑えている。島の北部にはアイランドパークという遊園地があり、多くの行楽客を集めている。

この歌には35頁⑩のところのような題詞がある。この歌の中に「能許の亭」とあるが、玄界灘の風波を避けるには能古島は不適で、実際は、糸島半島の東岸の唐泊（韓亭）、宮の浦港に碇泊するのが普通だった。眼前の能古島との間を「能許の浦」とみ、「能許のとまり」と詠んだと思われる。

昭和31年４月建立。書は小西春雄氏（福岡市長）　自然石（160×60）の枠取凹磨面（145×35）に刻まれている。

⑰　**唐泊万葉歌碑**（福岡市西区宮ノ浦唐泊359　東林禅寺本堂左前方）

からとまり　能許の浦波　立たぬ日は　あれども家に　恋ひぬ日はなし　（15-3670）

博多駅又は今宿駅より昭和バス西の浦線で宮の浦下車、東北へ700メートル

唐泊に仮泊して３日、折から月の光美しく海面を照らし、旅情一入の思いに、大使以下それ

ぞれの気持ちを歌に詠んだ（35頁⑩）。能古の島の万葉歌碑の歌もこの時のものである。

明治までは栄えたといわれる唐泊も、今は全くの一漁村となってしまっている。福岡市内とはいうものの静かな淋しい所だ。訪れた日、魚を荷あげする人、海岸で網の手入れをする人以外は人気もなく、静かな午後の一時であった。その部落の小高い丘の上に東林寺がある。開山は栄西禅師、宋の東林寺に似ているのでこの名をつけたという。丘の上にあるため眺めは素晴らしく、能古島、志賀島、玄界島等博多湾が一望のもとに見渡せる景勝の地である。境内の歌碑をよみ、眼前の博多湾を眺める時、おのずと1200年前の遣新羅使一行の苦難の船旅が思いうかんでくる。

昭和44年３月建立。書は鹿児島寿蔵氏（工芸家・歌人）　円柱形の自然石（120×70）に刻まれている。

⑱　**壱岐万葉歌碑**（長崎県壱岐郡石田町城の辻　万葉公園内）

石田野に　宿りするきみ　家人の　いづらとわれを　問はばいかに言はむ　(15-3689)

印通寺から壱岐空港への道を徒歩20分　北側の高台。

唐泊に３日間仮泊した一行は、博多湾を出て西にむかい、同じ糸島半島の西の付け根の引津に船泊りしている。そのあと更に西に進み、肥前国松浦郡狛島の亭（現在の神集島といわれる）に船泊てし、遙かに海の波を望み、各々旅情を慟ませて７首の歌を詠んでいる。

神集島を出た一行は、愈々ここから玄界灘に船出し、壱岐へ渡ることとなる。このあたりから壱岐印通寺まで40キロ余、今日の呼子～印通寺間のフェリーなら１時間10分だが、当時の船は、潮流と風の方向を考慮に入れれば、最短距離は４～５時間の航程であったという。

九州本土を離れる不安と、知らぬ他国の新羅へ入る不安と、その上当時西日本一帯にはやっていた疫病（天然痘といわれる）への不安の入りまざった気持ちで一行は壱岐へ上陸した。そして、ここで最初の犠牲者雪連宅満の急死という事態が生じた。雪連宅満は壱岐出身の卜占家であり、航路の案内、外交交渉の役割をになっていたのではないかと思われる。彼を失ったことは大変な衝撃であった。「壱岐の島に到りて、雪連宅満の死去りし時に作る歌」として、長歌短歌あわせて９首の挽歌が詠まれている。歌碑の歌はその１首である。今日、壱岐に雪連宅

満の墓といわれるものがある。印通寺の西方、石田峰と呼ぶ丘に、何の字もない、古い、小さな墓石である。畑に囲まれた小さな森の中にひっそりとたっている。

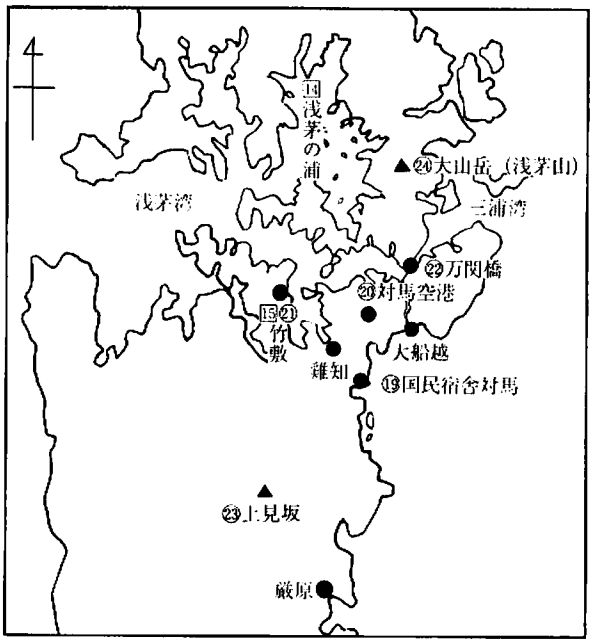
印通寺から壱岐空港へ行く道の途中に「万葉公園入口」という標識があり、そこから徒歩10分の小高い丘の上に万葉公園がある。眼下に印通寺港を望み、海上遙か九州本土を眺める景勝の地である。

昭和44年10月建立。書は木俣修氏（国文学者、歌人）　自然石（120×170）の枠取凹磨面（59×86）に刻まれている。石組みの台石上にある。

⑲　**国民宿舎対馬万葉歌碑**（長崎県下県郡美津島町雞知　国民宿舎「対馬」玄関脇）

百船乃　泊つる対馬の　あさぢ山　しぐれの雨に　もみたひにけ里　（15-3697）

厳原からバスで国民宿舎入口下車（20分）徒歩10分。




壱岐で雪連宅満を失い、益々前途に不安を感じる一行であったが、数日の滞在後更に対馬へむかった。壱岐から対馬へは最短距離で48キロ、古代の船旅では、潮流と風向がうまくいけば８～９時間で漕ぎ着くことができたという。しかしこの間は名にしおう対馬海峡で、現在の大型フェリーでさえ、時には大揺れに揺れて難渋することもあるところだ。

対馬へ着いた一行は、やがて浅茅湾に入り、ここで３首の歌を詠んでいる。37頁⑭記載の題詞と歌である。

歌碑のある「国民宿舎対馬」は、美津島町雞知の小高い丘の上にある。宿舎の裏側には一面に芝をはった広い庭があり、そのむこう崖下に、はるかに対馬海峡が見渡せる所だ。月明の夜ともなれば、皎々と照る対馬の月が海上に映えて月光をちらし、はるけくもきつるものかなの気持ちを一人強くさせる。打寄せる波の音、草かげにすだく虫の声。「天離る鄙にも月は照れれども妹そ遠くは別れ来にける」まさにこの心境を偲ぶところであった。

昭和47年９月建立。書は酒井豊氏（美津島町長）　自然石（90×144）の枠取凹磨面（44×77）に刻まれている。

⑳ 対馬空港万葉歌碑（長崎県下県郡美津島町雞知　対馬空港前小公園内）

竹敷の　玉藻なびかし　漕ぎ出なむ　君がみ舟を　何時とか待たむ（15-3705）

対馬の娘子玉槻

厳原からバスで対馬空港下車（40分）徒歩すぐ。

遣新羅使一行を、浅茅の浦で迎えた対馬の娘子玉槻の歌が2首ある。秋の景色にまじえて、一行への愛情がうかがわれる美しい歌である。歌碑には、その1首が刻まれている。対馬の娘子玉槻については、その素性は明らかでないが、恐らく当時海路を往来する旅人の旅情を慰めるための宴席に出た女性なのであろう。現在美津島町の東北部、万関と小船越の間、三浦湾に面した玉調という部落があるが、或いはここの出身の娘をさしたのであろうか。

現代の対馬への空の玄関対馬空港のすぐ近くの小公園にこの歌碑がたって、1200年をへだててなお対馬娘子が送り迎えしている。時代をこえた対象の妙に歌碑の選歌者の心を感じる。

ところで、美津島町では、対馬万葉の宝庫である浅茅湾一帯に万葉歌碑をたてて、広く人々に紹介し、あわせて観光推進に役立てようと、昭和56年より歌碑設置を計画し、現在までに7基がたてられた。国民宿舎の分をいれて8基、万葉歌碑異色の町となっている。

ただ一つ気になるのは、美津島町の万葉歌碑8基が、彫られたあと、全て金粉が塗ってあることだ。素朴で、率直な万葉歌と、金ピカの文字は、何となくそぐはない気がするが、どうなのだろうか。

空からみた対馬は、海で行く対馬とは又、別の趣をみせている。600メートル級の山々の連なる対馬だが、浅茅湾一帯は、リアス式海岸特有の無数の入江と、山々のおだやかな起伏のつづく箱庭的美しさだ。降りたった対馬空港は、昭和50年10月オープン、山を削り、谷を埋めてつくられた山岳空港で、新しいターミナルビルも完成し、離島に悩んだ5万島民にとって何よりの恩恵となっている。今後益々人の往来ははげしくなることであろう。

昭和56年1月建立。琴城氏書　自然石（88×145）に刻まれている。

㉑ 竹敷万葉歌碑（長崎県下県郡美津島町竹敷　金比羅神社鳥居横）

竹敷の　うへかた山は　紅の　八入(やしほ)の色に　なりにけるかも　(15-3703)　　小判官

雞知からバスで島の内下車（20分）徒歩200メートル。

今日、樽ケ浜から定期船に乗り、仁位浜まで1時間半の湾内を巡航すれば、まさにそのものずばり、遣新羅使の追体験の思いにひたることができる。しみとおるような静かさ、深い緑の水の色、山が海におちこみ殆んど人家の見あたらない両岸と、船の進むのにつれて動く眺めは、古代がそのまま残っている姿だ。途中寄港する竹敷が、万葉時代に「たかしき」といわれた港町である。今はすっかりさびれた漁村になっているが、今次大戦までは、明治以降要港となり、日本海軍の根拠地として賑わっていたという。現在は海上自衛隊対馬防備隊本部の建物が海岸の小高い丘の上にあるだけで、全くの寒村となってしまっている。

歌碑の歌は、「竹敷の浦に船泊てし時に、各〻心緒(おもひ)を陳べて作る歌十八首」の1首で、作者は小判官（正七位上大蔵忌寸麻呂）である。

新羅への旅も愈〻終り近く、竹敷は一行にとって、最後の寄航地であった。潮待ち、風待ちのしばしの憩いの間に詠んだ18首の中には、大使、副使、大判官、小判官と、対馬の娘子玉槻の名がみえる。

昭和56年1月建立。琴城氏書　自然石（110×103）に刻まれている。

㉒　**万関橋万葉歌碑**（長崎県下県郡美津島町久須保　万関橋）

潮干なば　またも吾来む　いざ行かむ　沖つ潮騒　高く立ち来ぬ　(15-3710)

厳原よりバス万関橋下車（50分）すぐ。

今は2か所で切れている対馬も、昔は南北80キロが一つの島となっていた。波静かな浅茅湾を切り開いて東海岸（日本海側）へ出るという永年の島民の願いを実現して、堀切りをつくったのは、21代藩主宗義真で、江戸時代初期寛文12年（1672）のことである。今の船越の瀬戸である。ところが明治になって竹敷の浦に海軍要港部が置かれ、大小の艦艇が出入りするようになったが、船越の瀬戸は水深が浅くて利用できず、海軍が新たに水路をつくった（明治33年）。以来80有余年、この万関の瀬戸の果した役割は大きい。現在の橋は昭和31年工費3千数百万円で架けかえられた長さ82メートル、高さ28メートルのアーチ型橋で、上下両島を結ぶ重要な橋となっている。その橋の北側の袂にこの碑がたっている。竹敷で詠まれた一連の歌の1首で、新羅へ船出する前のしばしの憩いの時の歌である。

昭和57年12月建立。碧山氏書　台の上の自然石（86×84）に刻まれている。

㉓　**上見坂万葉歌碑**（長崎県下県郡美津島町雞知　上見坂展望台広場北側）

竹敷の　浦みの紅葉　我行きて　帰り来るまで　散りこすなゆめ

(15-3702)　壬生宇太麻呂

厳原よりバス上見坂公園入口下車（20分）徒歩20分。

対馬を訪れる人が、一度は訪ねる対馬随一の景勝の地が上見坂展望台である。標高230メートルの山上で、眼下に見おろす浅茅湾の姿は天下の絶景といってはばからない。

かつてこの地は、後の対馬藩主宗家初代の重尚が、在庁の阿比留平太郎国時と対馬地頭の命運をかけて激しい戦いを展開した所という。以来すでに七百数十年、幾多の歴史を秘めて、おだやかな浅茅湾と、或いは高く、或いは低く連なる山々が、変らぬ姿を見せている。天平の昔、遣新羅使一行が眺めた浅茅の浦、浅茅山、竹敷の浦、対馬の月は、今も変らず、往時の姿をそのまま偲ばせてくれる。歌碑は、山頂展望台広場の一角に、浅茅湾を背景にしてたっている。又、広場には吉田絃二郎文学碑と2基の句碑もたてられ、佇む人も多いようだ。

説明板によれば「晴天の日には北の海の向うに夢のように韓国が浮かび、南の彼方に沖の島、壱岐、はては九州の山々が、我を招くように見え」るという。国境の島対馬の表看板になっている。歌は竹敷の浦で詠まれたものの中の1首で、竹敷の美しい紅葉を称えながら、早く帰ってきたい心を歌ったものであろう。

昭和57年12月建立。碧山氏書　台上の自然石（106×97）に刻まれている。

## ㉔ 大山岳万葉歌碑（長崎県下県郡美津島町大山　大山登山道入口）

秋さらば　置く露霜に　堪へずして　都の山は　色づきぬらむ　(15-3699)

厳原からバス大山入口下車（60分）徒歩すぐ。

国民宿舎対馬の万葉歌碑の歌と同じく、この歌は、「対馬の浅茅の浦に到り船泊てした時」に詠んだ3首の中の1首である。対馬の山の紅葉を見て、遙かに都の山々を思い出して詠んだ歌である。歌碑は、大山岳の登山口の道端にある。万葉の浅茅山については、所在がはっきりしないが、浅茅の浦に近いであろうといわれ、現在の大山岳であるという説が強い。大山岳は、南北対馬の中央、東側の三浦湾と、西の浅茅湾にはさまれた地狭部にあり、このあたりでは特

に目立つ大きな山である。大山の名もこれから出たという。頂上からの眺めも素晴らしく、特に紅葉の時は美しいといわれる。

昭和59年３月建立。書は白井傳氏　台上の自然石（94×148）に刻まれている。

（万葉歌碑の所在地、概要等について、その多くを『萬葉の碑』（田村泰秀氏著）より教示をうけたことに感謝したい。）

## おわりに

一行は、対馬をたって新羅へ渡り、何等の成果もなく帰途につき、この対馬で大使阿倍継麻呂は帰らざる人となった。そして、瀬戸内海を東へ進み、播磨の家島の近くまで帰りついた時に５首の歌を詠んでいる。

大きな犠牲をはらい、徒労に終った天平８年の遣新羅使の旅であったが、万葉集巻十五に145首を残し、万葉びとの思いを今に伝える貴重な資料となった。

岡山県玉島から、西の方対馬まで、遣新羅使人歌の万葉歌碑は上記の24基を数える。大きいのあり、小さいのあり、建設の由来もまちまちだが、いずれをとっても、土地の人々から親しまれ、愛されてたてられているのが多い。

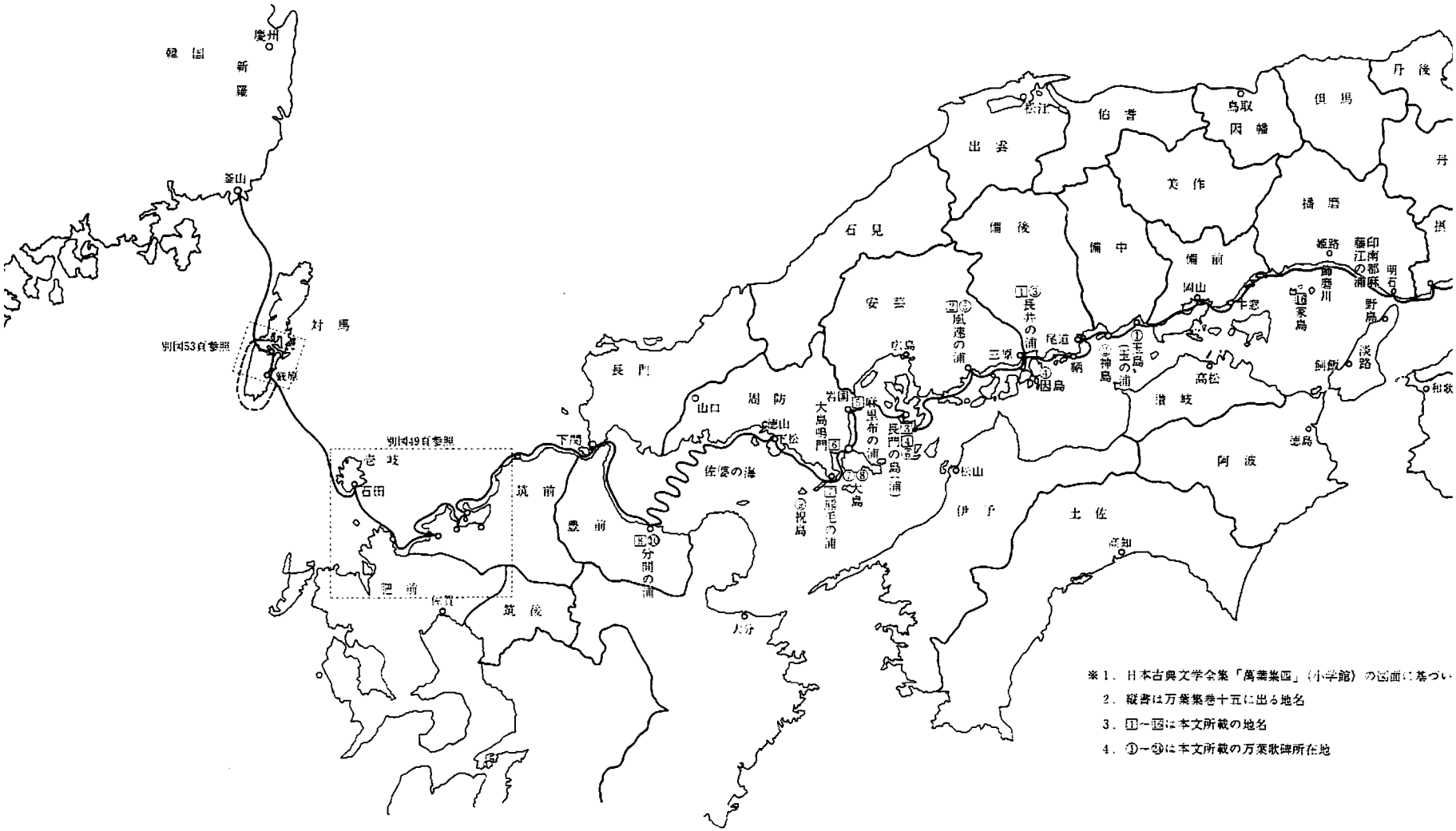
これらの歌碑が守り伝えられることが、万葉の故地が守り伝えられることにつながる。いつまでも万葉歌碑が伝えられ、万葉の風土が残されていくことを心から祈ってやまない。

**〔主要参考文献〕**

日本古典文学大系「萬葉集」（岩波書店）
日本古典文学全集「萬葉集」（小学館）
国史大系「続日本紀前篇」（吉川弘文館）
〃　「延喜式後篇」（吉川弘文館）
鴻巣盛広著「萬葉集全釈」（広文堂）
土屋文明著「萬葉集私注」（筑摩書房）
沢瀉久孝著「萬葉集注釋」（中央公論）
佐佐木信綱著「萬葉集事典」（平凡社）
伊藤　博他編「萬葉集事典」（有精堂）
伊藤博・稲岡耕二編「万葉集を学ぶ」（有斐閣）
犬養　孝著「万葉の旅」（社会思想社）
福田良輔編「九州の万葉」（桜楓社）
中村行利著「万葉と九州」（日本談義社）
筑紫　豊著「古代筑紫文化の謎」（新人物往来社）

永留久恵著「対馬の古跡」（対馬郷土研究会）
城田吉六著「対馬・赤米の村」（葦書房）
井上　博著「瀬戸内万葉考」（三瀧社）
下田　忠著「瀬戸内の万葉」（桜楓社）
本山桂川著「萬葉百碑」（新樹社）
本田義憲・田村泰秀著「萬葉の碑」（創元社）
桜井　満編「必携万葉集要覧」（桜楓社）

# 遣新羅使旅程図




※1．日本古典文学全集「萬葉集四」（小学館）の図面に基づい

2．縦書は万葉集巻十五に出る地名

3．1－14は本文所載の地名

4．①－⑭は本文所載の万葉歌碑所在地